



筑紫女学園大学リポジット

Dyslexia : Considerations on
Physiology, Pathology and Phenomena of a Child
with Specific Learning Disorder

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 桂子, NAKANO, Keiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1079

ディスレクシア
—限局性学習障害の子どもの生理・病理・現象の考察—

中野桂子

Dyslexia:
Considerations on Physiology, Pathology
and Phenomena of a Child with Specific Learning Disorder

Keiko NAKANO

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第32号
2021年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 32
2021

ディスレクシア
—限局性学習障害の子どもの生理・病理・現象の考察—

中野桂子

Dyslexia:
Considerations on Physiology, Pathology
and Phenomena of a Child with Specific Learning Disorder

Keiko NAKANO

Abstract

This paper aims to describe considerations on physiology, pathology and phenomena of a child with dyslexia, Eishi Hamaguchi through his note.

Hamaguchi is able to speak fluently and his verbal IQ is above average. But he can almost neither write nor read characters. Therefore, the school teacher reprimands him for thinking that he makes fun of her. It stands to reason that school turns into a system of suppression to him, and so he refuses to go to school.

Hamaguchi does not paint visible things and events. But he is able to paint the images in his mind so impressive in pencil, ball paint, marker, colored pencil, felt pen, charcoal, pastel and so on, that he has held the private picture exhibitions. His pictures are dream with minute and elaborate curved lines. His pictures show that he is good with his hands, though he says that he is clumsy with his hands. His nerve system to control his hands functions normally.

Hamaguchi has both dyslexia and face blindness. He is unable to remember characters and person's face, because he cannot see these normally. His conditions like this seem to be pathological change caused by disease of visual cortex or higher association area. In short, even if Hamaguchi watches characters, these are not visible to his brain. But, by comparison with his conditions, in his pictures almost rounded images are painted, and in these are seen the still or harmonious world. This means that he is happy and peaceful.

In conclusion, this papers gets a lot of people to understand many children who have dyslexia and the importance of support for them in school education clear.

Keywords: ディスレクシア (Dyslexia), 生理 (Physiology), 病理 (Pathology), 現象 (Phenomenon), 支援 (Support)

はじめに

読むこと書くことを厭い、それを苦手とする子どもは少なくない。むしろ、現在では、そういう子どもは増えているかに見える。学校教育はこのような事態を看過することはできない。学校教育は、何よりも子どもたちに読み書き計算、すなわち3Rsを教えること、これが学校教育が依って立つ基盤にして基本目標である。文字の読み書きができなければ前へ進むことができないので、ともかくも教師は児童・生徒が文字の読み書きができるように教え続ける。覚えの速い子も遅い子もいるが、ほとんどの子どもは、一応それなりのレベルへ到達して次の学年へ進む。ところが、どうしてもそのレベルに到達しない子どもが現れることがある。人並み以上に語ることはできるのに、書いてある文字は下手といえるレベルを越えて、ナグリガキ、デタラメといえるものになっている。教科書も声に出して読むことができない。こういう状況では、子どもがそのことによって何を訴えようとしているか聞きとらねばならないのであるが、教師の目線から、つい、この子は努力しない、言うことを聞かない、もの分かりが悪いと思込みがちである。重要なことは、この子はどのようにして読み書きができないのかと問うのではなく、この子は何を語りかけているのかという問いへの転換である。

現代の臨床医学は、学校教育のなかで際立って読み書きできない子どもに何らかの疾患があると見て、その症状にディスレクシア（限局性学習障害）という名称を与えている。何かわけが分からず、手に負えない子と思込み、決めつけていたものが、この名称によって、あせりやいらだち、不安が遠ざけられ、安堵感を生む。かつて、市村弘正は「命名のはたらきの一つは確実に、不安感ないし恐怖心の消去にある。そうだとすれば、自然ないし生活環境との交渉の中で人間が負わざるをえない種々の苦痛、たとえば病気に対して名前は深く関与していく筈であろう」とし、さらにこうも語っていた。「見えないもの、それゆえに神秘化されるとともに恐怖や不安をよびおこすものを、『見える』ものとすることによって、恐怖心を鎮静し消去すること、それが名前の重要なはたらきの一つであった」¹⁾。たとえ、ディスレクシアという分かり難い名称であれ、その症状が脳のどこかの疾患によるということが指摘されたとき、それは、ともかくも脳のどこであるかを探し、そこにどのような病変があるかを見ることができるとの可能性が開かれる。それだけでも周囲の人びとや当の子どもにも希望が生まれる。

だが、ディスレクシアは臨床医学における診断名ではない。脳のMRIを検索しても、ディスレクシアという症状を生じている場を特定するのみならず、そこに異常を見出すこともできない。よって、この症状に対して的確な診断も治療も下さない。したがって、ディスレクシアのあ

る子どもは病人や患者とはいわない。この子たちは他に障害のある子どもたちと同じように、そういう障害をもちながら日々を生きる。ディスレクシアが当の子どもそのものではない。子どもが生きるなかで、ある時、ある場面に現れるひとつの特徴がディスレクシアである。本論文は、ときたま、ディスレクシアの症状を呈しながら生きる子どもの考察である。生きる子どもの考察であるので、当然、子どもを対象として固定し、それを第三者の視点でとらえようとはしない。この考察では、子どもが語りかけていることを可能なかぎり、聴きとるものとなる。これが、生理・病理及び現象の考察である。

かくして、この考察を試みるために、ディスレクシアのある子どもが著した一冊の絵本を取りあげる。それは、濱口瑛士作『書くことと描くこと』²⁾である。この作品を選んだのは、生活のなかのことがありのままに具体的に語られているからである。ディスレクシアのある人の著作は他にも幾つか見ることができ、それは、自分はどのように生きてきたかを語り、世間の人びとにディスレクシアのある人を理解、支援してほしいとの主張が濃厚であった。過去の経験を回想し、自分なりの物語として構成し、それを基に、人びとへ自分たちの思いを訴えるという著述に対してはありのままの現象はないので、その考察は及びえない。現象の考察は、何の銜いもなく、ありのままに、その時、その場での出来事が語られているとき生きてくる。これが濱口瑛士の作品を取りあげた所以である。なお、こうした研究によって、ディスレクシアを明らかにした試みははまだ見ることがないので、ディスレクシアのある子どもの理解と支援・教育に何ほどか資することがあると思われる。

1. ディスレクシアの析出

濱口君は、本を声に出して読むこと、文字を書くこと、とくに書くことが遅く、文字自体も不正確なものが多い。テストの答案用紙から文字がはみ出し、文字の大きさはふぞろいで、誤字もある。文字と文字の間もまちまちで、文字のかたちもくずれていて、読みづらい。筆圧がコントロールできないので、鉛筆の芯が折れる。誤字を消しゴムで消そうとすると紙が破れてしまう。結局、文字といえないような文字のある答案で、しかも途中までしかできていない破れた答案用紙ができあがる。このような状態であるので、先生からはふざけていると叱られ、友だちからは小学校一のアホと見なされる。クラスメイトから「お前みたいな簡単な漢字も書けないバカはホームレスになるんだ」³⁾と言われたりする。濱口君は真面目に努力しているのだが、どうしても書けない。ひらがなは書けるが漢字となるとどうしようもない。作文の宿題などが出ると、夜遅くまで頑張っても書けないことがある。先生からは怠けていると叱られる。こうして、中学三年生の時にはほとんど学校に行っていない。濱口君は苦しみから解放され「ハッピーに不登校」⁴⁾しているのだという。

濱口君の作品『書くことと描くこと』は、15歳のときに刊行されたものである。その作品の表紙に濱口君の写真がある。この顔はもはや少年ではない。ここには濱口君の人と成りが現れてい

る。彼の眼光は人だけではなく、自分にも向けられている。濱口君は他人と自分を見すえている。ここには、信頼できる誠実な眼がある。この眼には迷いや暗さがない。何かを生み出そうとしている力が見られる。ひきしまった口は眼と協調して前へ向かっている。濱口君の写真には、すでに何かをなすことによって自分を創造し、自分の人生を切り拓く人格が現れている。

濱口君には豊かな言語能力がある。幼稚園年長のときの言語IQは133であったという。人が語ることは十分に理解でき、自分も人並み以上に語るができる。知的探求心も旺盛である。物語をつくることにも優れており、歴史、とくにローマ史には深い関心をもっている。また、濱口君は3～4歳の頃から自分でお話しをつくり、絵を描き、親にも説明をしていたという。やがて、この絵が評価され、小学6年のときに絵の個展を開催、それ以後、各地の絵画展への出品、個展の開催を続けている。濱口君の著書の末尾には、著者の紹介として「画家」との記がある。

濱口君が、近代国家が成立して普通教育が行きわたる時代の前に生まれていたとすれば、彼は生きることに何の支障もなかったのであろう。彼は、立派な信頼のおける人として、人びとに受け容れられていたはずである。そもそも、人類の進化史の観点から見れば、発声の器官と聴神経の発達につれて、人の聴覚には自然の音に加えて人の声を聴く機能が備わってくる。人類がいつの頃から発声によって物事や気持ちを伝え合うようになったのか定かではないが、おそらく、これは集団で大型獣の狩猟が始められた頃、200万年ほど前に遡るであろう。大型獣の狩猟には集団による協働がなければならず、それには相互の伝え合いが不可欠である。それを可能にするのは音声の活用であったからである。これに比して、描くことはずっと後になる。これは生きるための食の糧になるものではないからである。最古の壁画はスペインのラバシエガ洞窟内のもので6万4800年前のもので推定されている。ここには、動物のほかにはしごのような図形と点で描かれた川のようなものがある。これは、何かを表現したものであろうが記号や文字と見ることは難しい。ちなみに、正確に文字といえるものが現れるのは、およそ5000年前のことである。

かつて、文字は生活・生産と関わることはなく、主に支配層のなかの特別な部類の人びとに用いられたものである。人びとは、書くことができなくとも聴き、語ることができれば十分である。文字もまた、それを書くことよりも、たとえば聖書や仏典の識学者が読み、語り聞かせることに供されてきた。しかも、当時の文章には段落、句点、読点がなかったので、文字を読むことは声に出して読むことが効果的であった。かのアウグスティヌスは、自分の先生が声を出さずに本を読んでいるのを見て不思議に思ったという。黙読は容易にできない業であり、しかも本来、これは読むこととどういうかどうかといふことなのである。時が経ち、近代になって、生活のために読み書きの能力が必要になる。国家がそれを推進し、すべての子どもに普通教育が要求される。周知のように、日本では明治5年の学制がそれである。だが、この時期、読み書きができないことは恥ではなかった。社会の生活構造がそれを必要としていなかったからである。むしろ読み書きができることは日頃の仕事に性根が入っていない証拠であって、それこそ恥と見なされることもあった。大工や漁師や農民の子どもにとって読み書き算などを覚えることは道楽のたぐいであつたのである。このため、地方には農民たちによる学校打ちこわしさえ生じることになる。そ

もそも明治期に至るまでは読み書き計算が人びとにあまり求められることはなかった。明治期の学校においても、読み書き算のできる親はほとんどいなかった。学校で学んだ読み書き計算を子どもができないからといって、それが大きな問題とされることはなかった。それゆえ、ここにはディスレクシアは現れない。

ディスレクシアは義務教育が普及し、しかも社会が子どもの読み書き算の能力を要求し、読み書き算ができることを子どもの評価基準とするようになって析出される。経済における生産を第一とする社会構造は、子どもの間に競争を生み、それからこぼれ落ちた子どもは劣者となる。ディスレクシアのある子どもはその劣者となってしまう。ディスレクシアは他に障害のある子どもと違って、普通の子どもと何の変哲もなく、むしろ、優れた言語能力と記憶力があるため、かえって抑圧の対象にもなる。かつて、ブルデューとパスロン⁵⁾は、学校という制度は目に見えない「社会的な力」ないし「象徴的暴力」の装置であると指弾したことがあったが、イリッチ⁶⁾やホルト⁷⁾も学校は子どもを抑圧しているを見て、脱学校を唱えたことがあった。たしかに、学校は、子どもを解放するものでありながら、同時に抑圧するものでもある。とりわけ、ディスレクシアのあるような子どもにはそうである。ディスレクシアのある子どもは、厳しい競争社会にある現代の学校のなかで、あぶり出され、目に見えるように析出されたのである。

2. 症状

濱口君は「名前を書こうとして筆圧のコントロールが苦手なので鉛筆の芯が折れる。」「手先が不器用で、間違っただけを消しゴムで消すことはもっと苦手」⁸⁾という。「上手に書けない」「うまく読めない」「内容自体はわかっているのに…」⁹⁾ともいう。上手に書けないのは随意運動メカニズムに病変があるからなのか、うまく読めないのは大脳皮質領域の視覚連合野に異変があるからなのか。また、「何度書いても覚えられないんだ。画数の多い漢字を何回も書くことはとんでもなく疲労するし、それをしたところで書けるようにはならない……」¹⁰⁾ともいう。濱口君は字を書くことに全神経を集中して、見て書いた文字が記憶に残らない。これは、文字の視覚情報が脳内に視覚的記憶として保持されないため生じるのか。それに加えて網膜上に写された文字が、適切に処理されず、歪んだ、まとまりのない集まりに見えるのか。読み書きの能力は左大脳半球側の下頭頂小葉が関与しているというが、そこに病変があるのか。さらに人の顔が覚えられない相貌失認もあるという。これは、高次連合野の後頭側頭葉の病変によるものか。なお、「聞き取り能力が高く」¹¹⁾、会話は優れており、時間の経過を表す歴史に深い理解があり、さらに絵を描くことも優れている。問題は文字を書くこととそれを読むことである。ただ、「静かな教室で、みんながカリカリと字を書く音が鼓膜を刺激してくる。」¹²⁾そのため、気が散って書くのが遅くなるとある。いろんな音が同時に雑多に耳に入ってくる、聴覚過敏もあるのか。音をすべてひろいあげるとすれば、先生が授業中に話す声を聴くことはできなくなる。これは、注意して聞いていないのではなく、聴くことができないということである。

幼稚園の時、区の療育センターではADHD（注意欠陥多動性障害）と告げられ、言語聴覚士から会話の訓練を受ける。多動性があり、集団行動が苦手であるという。小学校の時には、K-ABC（カウフマン心理教育アセスメントバッテリー）の検査を受け、ADHD（発達障害）、アスペルガー症候群、広汎性発達障害、ディスレクシアなどの症状があるとされる。もちろん、ここで濱口君の言動に対して下されたものは、症状に関する名称であって、臨床医学における診断名ではない。生理学は、こうした症状が脳のどこかに病変があることは知っているが、それが脳のどこがどのようになっているかはわかってはいない。それゆえ、治療の方法が見つかっていない。しかし、濱口君のような症状を示す障害者に対して、学習の支援ないし教育はできる。もちろん、支援と教育は、障害のある子どもに努力を強いて、できないことを学ばせるということではない。できないことを学ばせようとするのは苦痛以外の何ものでもない。支援と教育は、症状そのものについては如何ともすることができないとしても、症状を理解することから可能になる。

3. 生理と病理

ディスレクシアという障害は、脳のどこかの疾患ないし病変があることを示している。これを知ることは治療の可能性を開くことになるが、それを知らなくとも、障害のある子どもに関わり、支援と教育において、学習を進めることができる。子どもの学習可能性は、脳の局所の疾患によって変容するとしても失われることはない。しかし、にもかかわらず、疾患を知り、それが脳のどのあたりにあるものかを知ることが、何はともあれ、安心を生む。その安心は、支援や教育における不安を取り除く。その疾患が遺伝によるものであれ、後天的な、いわば経験によるものであれ、ともかくも、それを知ることが、そういう疾患のある子どもへの働きかけを迷いのないものにする。したがって、濱口君にあるディスレクシア、その他幾つもの症状を生理及び病理学的知見¹³⁾によって理解することは、その支援と教育に欠かせないことである。

濱口君は、絵を描くことができる。その絵は個展を何回も開くほどの作品である。筆は、鉛筆、ボールペン、マーカー、色鉛筆が主で、サインペン、木炭、パステル、デザイナーズカラーがそれらに続き、ときに筆ペン、水彩絵の具が加わることがある。中心となる用具は、鉛筆やボールペンのように先の尖ったものである。これらで描かれた絵は精緻、徹底かつ細微、綿密といえるものである。濱口君は、「書くのが苦手なうえ、手先が不器用で、」というが絵を描くことにおいては、この言は当てはまらない。濱口君は、手先が眼をみはるほど器用である。もっとも濱口君の絵は、眼に見えるもの、すなわち視覚の対象を描いたものではない。いわば網膜の絵画ではない。濱口君の絵は、眼に見えないもの、心に想い浮かんだもの、いわば心像を眼に見えるものにしてしている。したがって、幻想的、物語的、神秘的である。それゆえ、この絵は現実の写生もしくは写実ではない。この絵の画材は現実のどこにもない。これは濱口君の心の中にある。

濱口君は人並み以上に手先が器用である。濱口君の場合、随意運動メカニズムは立派に働いている。これは、手指の運動を支配している頸髄前角にある下位運動ニューロンが正常に機能して

いることを意味する。この下位運動ニューロンに運動の指示をしているのは前頭葉の最後部にある皮質領域の中心前回、そこに拮がっている一次運動野の錐体細胞である。サルなどに比べてヒトの場合、この一次運動野は10倍ほど広がっており、これが手指のこまかい運動を可能にしている。もちろん、手指だけで描くことはできない。上肢全体、とりわけ右手の随意運動が細かに制御され、全体の筋肉がバラバラになって動かないようにしなければ手指は正常に稼働しない。絵を描くときにも、手指のみならず上肢全体を制御する必要があり、それは運動連合野と小脳、大脳基底核との協調による。このうち運動連合野は、運動前野（前頭葉の外側部）と補足運動野（前頭葉の内側面）とから成っているが、運動前野では外界の環境に対応する動作を生み、補足運動野では表象化された運動の記憶に対処する動作を生む。次に、大脳基底核は動員すべき筋肉とそうでない筋肉とを選び分ける働きをしている。この部分に支障があると、ある動作を行う場合、収集してはならない筋肉まで動員される。このため、自分がやりたいことができなくなる。これはジストニアといわれるが、この場合、たとえば文字が正しく書けない書痙が生じることがある。筋が収縮して字を書くとき、上肢全体が硬く突っ張るからである。であれば、濱口君が文字を書けないのは書痙ということになるのか。しかし、濱口君は緻密な絵をスラスラと描いている。これを見るかぎり大脳基底核に何かの異変があると見ることは難しい。さらに、小脳は、目的としている動作に動員される多数の筋肉の収縮と弛緩のタイミングや収縮の強さをきめている。小脳に異変があると動作の開始と終了のタイミングがチグハグになって、正常な動作ができなくなる。

書いたり描いたりするときの小脳の役割は大きい。小脳は前庭（古）小脳、脊髓（旧）小脳、そして小脳半球の大部分を占める新小脳に大別できる。古小脳は、水中の脊椎動物にあったもので、水中での体の平衡保持を行ったものであるが、ヒトの場合、これは内耳の平衡器官から情報をえている。旧小脳は、体肢の深部感覚、すなわち体肢の関節角度、運動方向、運動速度などの情報を脊髓で受容して、立位保持、歩行時の平衡保持に与っている。したがって、古・旧小脳のいずれも、外部からの感覚情報を入力しているが、新小脳は大脳皮質の運動連合野からの入力を受け、書いたり描いたりする時の手の運動制御に関わっている。いわば新小脳は、一次運動野と運動連合野との間であって、運動連合野が指示したプログラムを査定しているといえる。

濱口君の絵本に、「名前を書こうとして、筆圧のコントロールが苦手なので鉛筆の芯が折れる」とか「手先が不器用で、間違った一部だけを消しゴムで消すことはもっと苦手」「消したいところがうまく消せないのので力を入れてこすると、答案が破けた」¹⁰⁾とあるが、こうしたことは、小学生の子どもにめずらしいことではない。ただ、濱口君は書くことが異常に遅く、書かれた文字には誤りがあり、かたちも大小様々で、なかでも漢字は格別に大きい。文字の間隔もふぞろいである。文章としては読めないことはないが、これを書くだけでも濱口君は苦心惨憺している。濱口君の絵に描かれている緻密で滑らかな線と歪んだ文字と対比すれば、これが同一人物のものかと驚かされる。もちろん、濱口君の絵は、記憶によるものか、想像によるものである。小学校の頃の授業風景は記憶によるもので、写実ではない。これは、濱口君の脳に描かれた、いわば心像

風景の表現である。心像を描くとき、濱口君の手は自在に動いている。これを見ると、濱口君は随意運動メカニズムに確たる障害はない。

濱口君の絵は想像力によって、自発的に描かれたものである。これに対して、文字を書くことはそれをありのまま模写することである。この模写が濱口君には難業である。トレースならともかくも、文字をありのまま写すことは小学生のみならず大人でも難しい。大人でもそれぞれ文字にくせがあり、個性がある。だが、間違いはない。濱口君の文字は、丁寧に一生懸命書かれていることは分かる。筆圧がこもっており、努力の跡がうかがわれる。けっして、いいかげんに、書きなぐったものではないことは確かである。いったい、濱口君には文字が正しく見えているのか、随意運動のメカニズムに障害はないとすれば視覚に問題があるのではないか。それも光を受容する網膜ではなく、そこから入る情報を処理する脳に問題があるのではないか。濱口君の症状に対して、「聴覚優位でありながら、視覚優位の特性が極端に出ているという極めて稀なケースだそう。専門機関でも前例がないと言われ、」¹⁵⁾と彼の母親は述べている。これは、会話も物語を話すことも優れているので、絵を描くことも巧みであるとの両方を指しているのであろう。だが、この絵は、視覚による写実ではないので、視覚優位の特性が出ているわけではない。まさに、視覚こそが問題ではないのか。これは、濱口君は文字が正しく見えているのかという問いになる。

ディスレクシアのある若者が「僕には、小さい時から文字が揺らいでいたりにじんで見えるという、なかなか人には伝えづらい悩みがありました」¹⁶⁾と語っていた。濱口君の本にはそういう記述は見当たらない。ただ、「フェイスブラインド（相貌失認）という障害があるため、人の顔を覚えられないことが判明。……（今でも、誰であるかを声で判別していることが多い）」¹⁷⁾とある。人の顔を覚えられないとは、よく見えていないから記憶にならないということであろう。顔が認知されたあと記憶されるのは、海馬の中にある歯の並びに似た細胞（歯状回）の働きであるという。歯状回で1つの記憶に1つの神経回路をつくる細胞が新しく生まれ、それが記憶の神経回路になっている。なお、記憶には脳細胞の80%を占めるグリア（神経膠）細胞が関与しており、これがシナプスを制御して記憶中枢への集中調整を果しているという。濱口君の場合、この神経回路が生まれる以前の視覚情報処理に不具合がある。したがって、これは記憶の問題ではない。

同じように、文字に関しても、文字を見ているのは、脳の視覚情報処理機構である。つまり、眼の網膜から送られてくる外界の文字は大脳皮質領域の視覚関連領域で解釈される。ここに視覚連合野があり、このなかの最下層の後頭葉内側面に位置する一次視覚野では、見えるものの輪郭、色、ものの動きを認知するための情報が解読される。また、一次視覚野を後頭葉がとりまいていて、ここに視覚連合野がある。これは一次視覚野から入力されたものの認知を高めている。さらに、視覚連合野の前方に皮質領域の高次連合野がある。この高次連合野は、視覚情報以外の感覚情報を入力して、それぞれの情報を連合している。たとえば、ここにリングがある。視覚情報はリングのかたちや色のほかにその位置や距離を知らせる。これをつかむには、さらに、自分の顔や体の向きや手をどこまで伸ばせばよいのかが分からねばならない。これは、体性感覚野や体性

感覚連合野を介した情報である。さらに体が動いていたり、傾いていたりするときには、それを調整する内耳からの前庭入力が必要。したがって、視覚、体性感覚、聴覚からの情報など、異種の感覚を連合してはじめてリングをつかむことができる。このような働きは高次連合野における後頭葉の前方の頭頂葉・側頭葉領域において行われている。もっとも、「これがリングである」ということは、複雑な視覚情報処理を経て、はじめて理解される。この理解は、網膜を介して得られた視覚情報が視覚連合野で処理されるだけで達せられるわけではない。これは「りんご」であるとの理解は、「りんご」という言葉、すなわち概念の理解を前提としている。こうした概念は、たとえばイヌにはない。イヌの眼前にリングを置いて、ひとつの物体の視覚情報が得られたとしても、それ以上は進まない。「リング」という一般概念を、いつか、どこかで知り、それを今も記憶しているとき「これはリングである」との理解が得られる。もちろん、濱口君は「これはリングである」と理解する。人並み以上に記憶する力があり、語り・聴く能力がある。ただ、文字の読み・書き、とくに書くことには難渋している。書くことはほとんど不可能といえるほどである。書くことに関してはある種の文盲といわれるに等しい。これは、やはり、視覚連合野前方にある高次連合野の視覚情報処理のどこかに支障があるのではないか。

高次連合野における視覚情報処理は、上頭頂小葉に至る背側経路と側頭葉下部に至る腹側経路が関与している。背側経路では見えるものの視空間内における位置情報、腹側経路では形態視情報が解読される。このため、左大脳半球側の上頭頂小葉の皮質下白質と右大脳半球側の頭頂・後頭移行部の白質に脳梗塞が生じて、両側の背側経路が損傷された場合、見えるものの視空間内の位置情報の解読が困難になる。したがって、たとえば正方形に三列並んでいる9個の点のうち4つに3本の線が引いてある図形がある。これと同じ図形を、与えられた同様な9個の点に線を引くことはできない。あるいは、平行するゆるやかな曲線のガイドライン内にラインに触れないように線を引くことも難しい。こうした症状は、視覚性の失調症であり、見えるものの視空間位置情報が解読できないことによる。ここには、見えるものの視空間内における位置情報、その位置関係や向きを判定することもできていない。であれば、濱口君にはこれに似た症状があるとはいえない。濱口君は、描画には優れていて、モデルがなくとも、丸・四角・三角のような図形は自在に描くことができるので、形や角度を認知し、構成する力はある。ただ、文字の漢字については、向きと位置関係の認知に支障があるといえる。すなわち、見えるものの形は分かっているが、その形が視空間内のどこにあって、どこへ向いているのか、ほかの文字とどのような位置関係にあるのかが判定できていないようである。濱口君が、「手先が不器用で……」と語っていたが、これは視覚性の失調によって視覚誘導が困難になり、結果として手の運動が損なわれているのであって、手の随意運動に損傷があるわけではない。その他、濱口君には人の顔が覚えられない相貌失認もあるという。この症状は、両側の後頭葉下部に至る腹側経路に障害があると現れる。この経路は形態視情報を解読することに関わっているからである。

濱口君は、幼稚園入園（2年保育）時「同じ年齢の子に比べ、舌足らずなしゃべり方で、『さ行』が『た行』になったり、『なんで』が『なんじ』となったりし、両親以外には意味がわかっ

てもらえなかった」¹⁸⁾という。失語症のひとつに伝導失語がある。これは、ことばの理解もよく、発語にも問題はない。ただ、吃音のようなものがある。これは左縁上回を中心とした左下頭頂小葉に疾患があるためと考えられている。だが、濱口君の場合、幼稚園の年長者のとき療育センターで言語聴覚士のトレーニングを受けて、問題は解消している。これは、発達成長のたんなる遅れであって、脳の病変ではなかったと見られる。残された問題は、やはり文字が書けないことにある。すでに見たように、図形を模写するという働きは両側の上頭頂小葉に病変があると難しくなる。運動障害もなく、見たものが何か分かるのであるが、図形の模写ができないので、これは空間に関する認知、すなわち視覚構成障害である。また、読み書きは左大脳半球の下頭頂小葉が関与しており、そのうち、この下頭頂小葉の上端にある頭頂間溝に病変があると、文字だけが書けなくなるという症状が現れる。だが、ここに病変があっても図形の模写はできる。図形の模写は頭頂間溝以外の下頭頂小葉皮質が関与しているといえる。

7番染色体長腕の一部に欠損があり、大動脈上部狭窄症という先天奇形の疾患がある。ウィリアムズ症候群である。この症状では、たとえば正方形のモデルをトレースはできるが、それを見ながら模写することができない。トレースはできるのであるから、運動系にも視覚的認知能力にも障害はないといえる。問題は視空間的記憶にある。図形を見て、覚え、その記憶を実行する情報伝達に不具合があると見られている。濱口君は「無理だよ、何度書いても覚えられないんだ。画数の多い漢字を何回も書くことはとんでもなく疲労するし、それをしたところで書けるようにはならないから、……」¹⁹⁾という（もちろん、この本の文章はパソコンで書かれている）。これは、視空間記憶の問題ではないか。なにかを見ろという視覚的体験は視空間記憶として保存され、必要に応じて思い出される。たとえば、昨日あったことを書くという作文が宿題に出れば、犬と散歩した、公園で遊んだなど、その時のイメージ的記憶を文字に変換して書くことになる。短期の記憶であれ、長期の記憶であれ、おぼえていること、知っていること、できたことなど、書くことができる。それらの記憶がすべて動員されて、作文になる。イメージ記憶には、聴覚の言語的なものと視覚・空間的なものがあるが、濱口君は視覚・空間内イメージを絵に描くことが巧みであるし、語ることもできる。だが、文字にすることはほとんどできない。

人の記憶は、過去の経験の再現ないしコピーではない。この記憶は、経験のなかから選別されて構成されている。これがイメージ的記憶である。この記憶は、ことばによって、消去されえない確かな証拠となって保持される。さらに文字は、この記憶を視覚化して、消去されえない、確かなものにする。濱口君は、この文字が覚えられないという。覚えられないのは記憶が問題であるのではなく、文字そのものが正しく見えていないから覚えられないのではないか。文字は線の寄せ集めであって、これは自然界に見ることのない、人工の抽象的図形である。これが目の細胞に受容され、大脳皮質の視覚領域に情報として入力され、そこから高次連合野へ送られ、階層的に調整され、それが記憶となって順次抽出される。この記憶には、両側の側頭葉内側部と左大脳半球側の側頭葉外側面、いわば左側頭葉から後頭葉における広範な領域が関わっていると見られる。濱口君にはこの部分に支障があるのではなく、文字を文字として見る視覚領域ないし高次連

合野のどこかに支障がある。円や三角形、四角形のような調和のあるものではなく、曲線や直線のようなものが寄せ集められた不均衡な図形は眼に映っても、脳は見えてはいない。すなわち、はっきりと見えないのである。そうした図形を覚えることは容易ではない。脳は、調整できないでたらしめなものを記憶することはできない。ディスレクシアのある濱口君に対して、その生理及び病理の観点から言えることはおよそこのようなことである。もちろん、これは推定であって、いまだ、脳のどこでものを見ているのかは明らかにされていないのであるが、それでも、こうした理解は、濱口君の行動を客観的にとらえ、理不尽といえるものも受け容れる余裕を生んでいる。

4. 現象

ディスレクシアは濱口君そのものではない。それは、生理・病理のレベルでは濱口君の一部にすぎない。だが、濱口君が生きることに於いて、ディスレクシアは生きることの現象である。したがって、ディスレクシアは生きることから分割・排除されるものではない。濱口君が生きることに於いてディスレクシアは現れる。その意味で、ディスレクシアは濱口君その人の現れである。そういう人として濱口君は生きる。これを解説するのが他ならぬ現象の解説である。この濱口君にとって、文字は何も訴え、語りかけてこない。ただ、多様な線の集まりとして現れている。これはかたちをなしていない。象形文字である漢字でさえも語りかけてはこない。むしろ、漢字こそがとらえがたいものとして現れてくる。ところが、日々、学校で教えられるものは文字であり、それを写し書くことである。濱口君が生きる場所はこうした環境には見出せない。濱口君の居場所は、読み、書く、いわば最も視覚を要するような環境ではなく、聴き語る聴覚の世界にある。視覚は空間に拡がりを生み、聴覚は時間の流れを生む。それゆえ、濱口君は歴史に関心を示し、物語を語り、それを描く。描くのは視覚的活動であるが、それが外界の対象を見て描くのではなく、心の中に現れた出来事を描くのであるから、これは想像による自発かつ自由な描画である。それゆえ、この描画は視覚的活動とはいえない。濱口君が見ているのは脳の中に現れた、いわば心像である。

こうして描かれた絵は、濱口君が生きている世界がどのようなものであるかを語りかけている。濱口君の絵には宏大な空が描かれ、そこに巨大な城、無数の天使、鳥のような生きもの、プタのようなもの、魚のぬいぐるみのようなものが、宇宙船や飛行機などとともに漂っている。これは、本来眼に見えないものである。この見えないものを濱口君は見えるものとして描いている。ここに、心像の可視化がある。それゆえ、描かれた世界の宏大さは現実の視覚的世界をはるかに越えている。大空を漂っているものの足は、ほとんどないかのように描かれている。大地にいる生きものの足も見られない。眼はどれも黒の点で、小さく描かれている。そのため、これらの生きものはどこを見て、どこに向かって進もうとしているのか分からない。よって、見ること（Sicht）は当初から見る者の意図（Ab-sicht）があり、人は見ることに於いて、何かを意図し、何かを求めている。すなわち、見る者は、ねらった対象（Gegenstand）に向かって立ち、向き

合って (gegen-über)、これを手に入れるため、周りを見まわし (Um-sicht)、最も速く手に入れられる位置を見分け、偶然の出来事を注意深く予見 (Vor-sicht) し、かつ見とおし (An-sicht)、目標を達成する。濱口君が描いている眼はそういう意図し、行動する眼ではない。眼は働かない眼であり、そのために眼に随って行動する足もいらぬ。しかも、同じ障害をもつマッケンジーの絵のように²⁰⁾、天空に漂っているもの、地上の建物には円形のものが多い。人の顔も丸い。絵には円形のものが多い。三角や六角形などのように角のあるものと違って、円形には動きがない。絵には安定した穏やかさ、安らぎのようなものがある。

濱口君の絵には、小学校のときの授業風景が描かれている。これは記憶であるので、イメージ的記憶の描写である。濱口君の絵には見たもの、見えているものは描かれていない。この絵には、遠近や陰影 (明暗) がない。これは現実の対象から発せられる光を感受する網膜が介在していない絵である。ここには、濱口君の視覚経験はない。こうした視覚経験のない絵、すなわち心像絵画が濱口君の絵のすべてである。これらの絵には、何かほのぼのとした明るい、ほっとした感じを生むものがある。ここには、ささやかな平安、平和、幸せのようなものがある。濱口君はこう語る。「誰かが傷つかないでいい場所。誰もが見捨てられることなく迎え入れられる寛大さ。

自分が自分らしく、あなたがあなたであるように 振る舞えること。それぞれのささやかな幸せの寄せ集め。……」²¹⁾。

濱口君の絵は、濱口君自身が生きている世界の描写であり、同時に、濱口君がそのように生きようと望んでいることである。ここには、もはやディスレクシアはない。ディスレクシアは濱口君が生きていることの中に溶解され、濱口君そのものとして現れている。このことは、世界が濱口君に対して幸せあるものとして現れ、語りかけていることを意味している。

むすび

濱口君は、「現在、私は殆ど学校に通っていない。言うなれば、立派な中学3年生の不登校児である。」そして、「日々穏やかな気持ちで“ハッピーに不登校”している」²²⁾という。好きな絵を描き、文字はパソコンによって書くことができるので、苦痛はないという。しかし、学校教育がすべての児童の成長と幸せに寄与するべきであるとすれば、ディスレクシアの子どもも受け容れられ、支援と教育に供されねばならない。これは当然のことである。濱口君のような障害のある子どもが、日々穏やかな気持ちで、「ハッピーに登校している」ということが本来の学校教育のあり方である。

なお、ディスレクシアのある子どもを理解するために、ディスレクシアのある子どもすべてを考察の対象にする必要はない。それは、一本の銅が電気を通すことが分かれば、すべての銅に試みる必要がないことと同じである。かつて、ヤスパースは「人間は互いにひどくちがっている、しかしすべての人間は共通のものをもっている、ということが経験の示す二つの面である」²³⁾と述べたことがあった。もちろん、こうしたことはディスレクシアのある子どもにおいてもいえる。

これらの子どもたちはすべて、違った経験をして育っているもので、それぞれ特殊かつ独自である。にもかかわらず、この子たちにはディスレクシア特有の共通なものがある。この共通なものは多くの子どもを実験、観察、調査したからといって見えるものではない。それは、子ども自体から発せられ、それを読み解く人の想像力によって導かれる。この想像力によって、ひとりのディスレクシアのある子どもの理解が、同じような症状のある子どもの理解へと行きわたる。本論における生理・病理、現象の考察はこの想像力をよすがにした考察である。

注（引用文献）

- 1) 市川弘正 『「名づけ」の精神史』 みすず書房、1989年、13～14頁。
- 2) 濱口瑛士 『書くことと描くこと』 ブックマン社、2017年。
- 3) 濱口瑛士、同書、55頁。
- 4) 濱口瑛士、同書、54頁。
- 5) P. ブルデュー・J-C. パスロン 『再生産』（宮島喬訳）、藤原書店、1991年。
- 6) I. イリッチ 『脱学校の社会』（東洋・小澤周三訳）、東京創元社、1977年。
- 7) J. ホルト 『21世紀の教育よ、こんにちは』（田中良太訳）、学陽書房、1980年。
- 8) 濱口瑛士、前掲書、11頁、13頁。
- 9) 濱口瑛士、同書、24頁。
- 10) 濱口瑛士、同書、35頁。
- 11) 濱口瑛士、同書、45頁。
- 12) 濱口瑛士、同書、12頁。
- 13) この知見は、主に下記の文献によるものである。
 - ・岩田誠 『見る脳・描く脳』 東京大学出版会、1998年。
 - ・鹿島晴雄・種村純（編） 『よくわかる失語症と後期脳機能障害』 永井書店、2003年。
 - ・鹿島晴雄・種村純・大東祥孝（編） 『よくわかる失語症セラピーと認知リハビリテーション』 永井書店、2008年。
- 14) 濱口瑛士、前掲書、11頁、13～14頁。
- 15) 濱口瑛士、同書、47頁。
- 16) 南雲明彦 『LDは僕のID』 中央法規出版、2012年、1頁。
- 17) 濱口瑛士、前掲書、47頁。
- 18) 濱口瑛士、同書、45頁。
- 19) 濱口瑛士、同書、35頁。
- 20) 『マッケンジー・ソープ作品集』 ギャラリー江夏、2003年。
- 21) 濱口瑛士、前掲書、110～111頁。
- 22) 濱口瑛士、同書、54頁。

23) K. Jaspers, *Die Idee der Universität*, Reprinted Springer-Verlag, Berlin und Heidelberg, New York, 1980, p.93.

(なかの けいこ：初等教育・保育専攻 准教授)